

「100年時代を迎えた人生戦略」 第10回 渡邊 昌 先生

渡邊昌先生（一般社団法人メディカルライス協会理事長）は古くから本学会の理事として、食の重要性を唱えてこられた医師である。病理の研究者であった渡邊先生がどのように食と健康・医学の研究に没頭することになったのか。また、最近ではメディカルライス協会を設立され、玄米と健康のサイエンスだけでなく、農業者、流通加工者までをもつなぐ仕組みづくりを進められている。今回のインタビューでは、渡邊先生の今までの研究を伺い、メディカルライスのコンセプトについてお話しを伺った。



渡邊 昌 先生



内藤 裕二 先生

新型コロナウイルスの影響でWEBインタビューで実施されましたが、玄米のトピックで大いに盛り上がりました。

玄米のサイエンスで生産者から 消費者までをつなげたい

病理から、栄養の研究者へ 自分の身をもって知った食の重要性

内藤 今日は渡邊先生と対談できることを光栄に思います。ありがとうございます。コロナウイルスの影響で、対面ではできませんがオンラインで進めたいと思います。

渡邊 よろしくお願ひします。

内藤 先生は、国立がんセンター疫学部長から、東京農業大学の教授を経て、国立健康・栄養研究所の理事長も務められました。医師でありながら、なぜ栄養の研究に進まれたのでしょうか。どうして農学部に行ったかというところをまずは伺わせていただけますか？

渡邊 僕は慶應義塾大学医学部卒業ですが、山岳部卒業というくらい部活動に熱中していました（笑）。医学部を卒業時、山岳部の先輩から「病理は暇だから、大学院でも山へ登れるよ」と言われてましてね。それで、コーカサスの一番高いルウェンゾリとか、アフリカのキリマンジャロとかね。随分あちこち海外の山を登ることができました。大学院を卒業する頃に、当時の教授の宿題報告の研究を分担させていただき、その後、留学に行かせてもらうことになったのです。そして、National Cancer Institute(NCI)の病理に行きました。

内藤 病理に行かれたのはそんな経緯だったのですね。山岳部から始まるのですね。

渡邊 はい。ところがNCIの病理に行ったら、も